

日本事情「吉野川プロジェクト」

～参加者の視点から見直す～

The Yoshinogawa Project -An attempt of project work at the Tokushima University-

徳島大学総合科学部

吉廣綾子

徳島大学留学生センター

Gehrtz 三隅友子

ABSTRACT

For foreign students who live in the Tokushima prefecture and study Japanese culture and society, it is necessary to understand the area that is close to them and to communicate freely with the people who live there. Therefore we selected the Yoshinogawa, a beautiful first-grade river, which is also a symbol of the prefecture, as a topic for our project work. We had the foreign students together with a group of Japanese students involved with people, things, and society that are connected with the Yohino River. By using them as resources for the project work the students were able to get in contact with the environment surrounding the Yoshinogawa. What they learned in this process will help them their campus life.

Through questionnaires we asked some participants what they thought of the "Yoshinogawa Project" as a project work and what kind of effect or significance it had for them. After evaluating the results of this inquiry we are considering several improvements in our project work.

はじめに

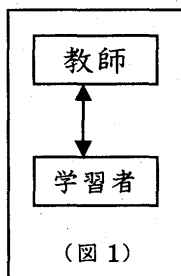
留学生対象の開講科目として大学には「日本語」及び「日本事情」が、設置されている（昭和 37 年当時の文部省省令）。前者は、留学生が大学生活をおくるために必要な日本語の能力（文法、語彙、表現）を育成することが目的となる。しかし後者の位置づけに関しては、教育内容を「一般日本事情、日本の歴史、文化、政治、経済、日本の自然、日本の科学技術といったもの」あるいは「各授業科目の内容については、日本人学生に対する一般教養科目の趣旨と同様の教育的意図を実現できるように留意するとともに、学生が在学または進学する学部の専攻分野に応じた基礎知識を持ち合わせて学習しえるよう配慮することが望ましい」とし、その教育水準「大学教育の水準に応じた内容を有することを要し、初歩的内容のものは従来どおり基準外」とするという設定はあるものの、各大学の授業担当者にその内容・方法・目標は委ねられており、これまでも様々な内容の報告

がされている。

徳島大学では2001から2004年の4年間に「日本事情」において「吉野川プロジェクト」を実施した。さらに、このプロジェクトワークでは留学生と日本人学生の協同学習（注1）を導入した。当初教師主導の形から始まり、実施の過程で関る者の役割が変わることや知識を習得する以外の学びの形が存在すること等、この活動は参加者にとって従来のものとは違った学習として捉えられた。本稿では、この活動に参加した一人の日本人学生が活動を体験し数年を経て他の参加者らによびかけ、この活動が参加者自身にとってどのような意義があったのかを調査した。その調査結果をもとに、実施者である教師とその意義と問題点を再構成することを試みた。

1 プロジェクトワークとは

徳島大学共通教育科目「日本事情」は留学生対象に開講前期に「日本事情Ⅰ・Ⅲ」、後期に「日本事情Ⅱ・Ⅳ」の名称で開講した。そのうちの後期開講の一つを「吉野川プロジェクト」と名づけ実施した。学習活動のスタイルとしていわゆる「プロジェクトワーク」と「協同学習」を採用した。

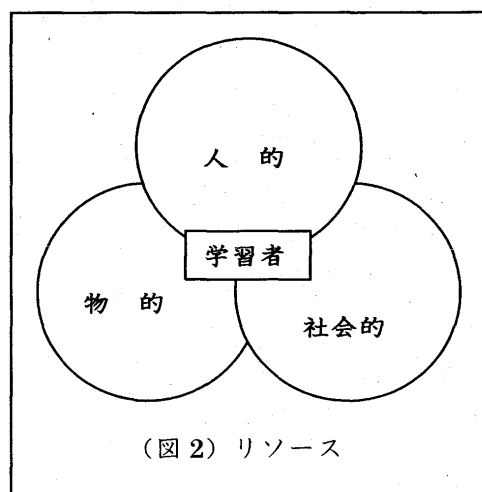


（図1）

プロジェクトワークとは、「学習者がグループでプロジェクトを計画し、その計画を遂行していく過程で目標言語をできるだけ多く使用することで、目標言語の習得と定着を図る学習活動である」（注2）。すなわち教師が知っている内容、知識が教師から学習者へと注入される活動（図1）ではなく、現実の様々な活動に即したタスク活動が行われる。さらに、プロジェクトワークには、成果発表型（学習した内容をまとめて広く配布する）、調査型（日本語の話者や社会を

調査する）、共同作業型（教師、または他の日本人との共同作業を中心にする）、日本人参加型プロジェクトワーク（注3）といった型も存在する。型の違いはあっても、共通の特徴として、①教室と現実の生活をつなぐ②学習者がより主体的になる③体験的な異文化接触を起こす活動であることが挙げられる。この特徴に加えてリソースが重要な役割を果たす。このリソースは、学習のための素材であり、人的、物的、社会的の三種が組み合わさって教材となる（図2）。

教師はこれらのリソースを提示するだけでなく、授業以外に学習に関する相談を受け、学習を支援する活動として学習カウンセリングを行う。また、評価に関しても考え方が異なる。教育活動の前後の学習者の状態を比べてその伸びや変化をみて成績を出すという評価に加えて、プロジェクトワークでは、活動に関った者全てが自らをそして他者を評価することが行われる。これら複数の視点からの評価によって吟味、検討がなされ、次回のプロジェクトの改善へとつながる、循環型評価と考える。

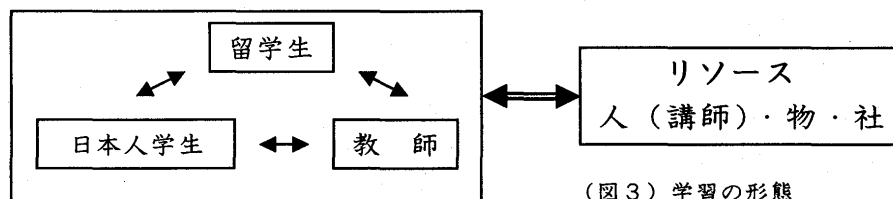


（図2）リソース

2 吉野川プロジェクト

2-1 テーマとしての吉野川

「吉野川プロジェクト」では、まさに吉野川を主なリソースとした（注4）。その理由は、徳島を代表する事物であり、徳島の生活、文化そして歴史を語るときに前提ともいえることが挙げられる。リソースとして、人的・社会的・物的のどれにも匹敵する様々なものを持つこと、徳島で生活する上で「吉野川」を知ることが非常に重要であるとみなしたからである。テーマを設定した教師自身がまず「吉野川」を学んでその知識を学習者に提供するのではなく、学ぶための方法を提示しながら、教師が学習者と一緒に学ぶというスタイルをとった（図3）。



（図3）学習の形態

2-2 活動の特徴

テーマに加えて、次の活動を設定した。

- ① 人的リソースとしての各専門家（講師・ゲストスピーカー）の講義
 - ② 留学生の他に日本人学生の参加（協同学習）
 - ③ 最終プロダクトとして自ら吉野川に関するテーマを選び発表及びレジュメの作成
 - ④ 最終プロダクトの公表（発表風景はDVDにレジュメは冊子にする）
- 上述のプロジェクトワークのいくつかの型を総合させたものである。

2-3 年度別スケジュール

年度別のスケジュールは参考資料①（以下資料とする）のとおりである。年度によって差があるが、基本的な流れとして、期間中に専門家の講義を数回設定し、その前後に準備とフィードバックを行った。まず10月当初に「吉野川の概要（国土交通省）」で吉野川を概観し、そこから「農業と農作物（竹・藍・野菜）」、「吉野川の魅力（写真）」、「吉野川の生物（魚）」、「吉野川と古地図（地理学）」、「吉野川と方言（言語学）」といった内容を、最後に「吉野川と市民運動（第十堰問題）」が4年間に行ったものである。これらの講義に加えて、吉野川クルーズ、ひょうたんじまクルーズといった乗船による実地体験も加えた。12月から、参加者が各自テーマを決め調査を行い、1月の発表に向けての準備を進めた。教師は各学習者のテーマの相談と調査の方法、まとめ方等の相談（学習カウンセリング）を行った。

2-4 受講者と参加者

表1のとおりである。単位の必要な学部留学生に加えて、大学院生及び研究生の参加も認めた。留学生は、工学部と総合科学部に所属し、工学部の学生がほぼ3分の2を占める。日本人は総合科学部の日本語教育関連の受講生及び国際交流を希望する日本人学生を募った。2001年は留学生と日本人学生のバランスがよく

ペアワークの形で授業が進められた。

表 1 参加メンバー

	2001 年	2002 年	2003 年	2004 年
中国	3	4	7	7
韓国		3	2	3
マレーシア	2		2	1
インドネシア				1
ベトナム			1	
日本	4	2	2	2
計	9	9	14	14

2-5 活動

教師の事前準備として、講師の依頼と様々な資料の収集が挙げられる。講師に対しては、留学生に対して基本的な内容を、より平易な日本語で話すことと理解を助ける様々な資料の配布と紹介をお願いした。入手した資料を教材としてリライトすること（簡単にする、読み仮名をつける）や、また理解を確認するためのタスクシート（資料②-1）や語彙表の作成も行った。講義の前の授業では、教師主導でこれらの資料を理解することと内容を理解した後、講師に聞きたい質問（資料②-2）を記述した。この質問は講義前に送付し、留学生の興味関心及び日本語能力を知ってもらう材料とした。

講義当日は、まず吉野川のテーマに即したお話（約 60 分）と事前に送った質問に対する答えを聞く活動を行った。吉野川という共通のテーマ以外は、4 人から 5 人の各講師それぞれの職業（徳島大学の教員を含む）、年齢、方言等の異なるスピーチを聞く機会となった。各講師の話の内容（専門分野）は違うが、共通に使われる固有名詞やことばがキーワードとして頻繁に使われていた事実もある。学習者は話の内容がどのくらい分かったか（%による自己評価）とその理由を含めた感想（自由記述）を記した（資料③）。

教師は、各講義を録画し次回授業においてフィードバックを行った。具体的にはわかりにくかったところの解説や言葉の確認である。講義及びフィードバックの後、お話に対する感想とさらなる質問（もっと聞きたいと思ったこと）とお礼を記した。講師に対する感想等は、学習者が作成した報告集と発表 DVD と共に講師に送付した。

<教師の動き>

- ① 準備 内容の決定・講師への依頼
↓ 資料からの教材作成 講師とのやりとり

- ② 講演 学習者と共に内容を聞く 録画
学習者の理解を確認する

- ↓
③ フィードバック 内容・語彙の再確認
新たな問題点の確認
(自らのテーマを選ぶヒントの提供)

- ↓
④ 講師へのフィードバック お礼・新たな問題点の送付

<半期の中でこの活動を4回～5回繰り返す> ②・③は授業

2-6 最終課題（発表・レジュメの作成）

最終課題のテーマは表2のとおりである。学習者は、上述のように12月ごろからそれぞれのテーマを決め準備を始める。

表2 最終課題のテーマ

2001 年	2002 年
<ul style="list-style-type: none"> ・吉野川とラジャン川の比較 ・吉野川の魚 ・吉野川について学んだこと—インタビュー 	<ul style="list-style-type: none"> ・かずら橋の旅 ・吉野川の石 ・吉野川と藍染め ・飲水思源 ・吉野川のダムの役割 ・高地蔵は吉野川を語る
2003 年	2004 年
<ul style="list-style-type: none"> ・吉野川～第十堰と住民運動～ ・吉野川が生んだ優れた人物 ・吉野川の橋 ・吉野川の魚 ・吉野川の自然 ・吉野川における方言 ・暴れもの吉野川とその対策 ・吉野川を学んで 	<ul style="list-style-type: none"> ・藍 ・吉野川と観光スポット ・吉野川と松花江の比較 ・第十堰プロジェクト ・東環状大橋について ・第十堰と治水 ・吉野川に住む生き物について ・吉野川の水資源と電力システムからの想い

テーマを決める際には、各自の興味または専門とこれまで得たりソースを照合させる。例えば、電子工学科の学生は電力資源としての吉野川の役割を、生物工学科の学生は吉野川の魚を、また藍に関してのテーマを選んだ二人は協力して

一人が藍染体験をレポートし、もう一人が藍の生育と歴史に関して調査を行ってその内容を二人で報告している。各人のテーマを早い時期にクラスで明らかにすることによって、共通のテーマを選んだもの同士がグループになって取り組むこともあった。また、講師の話を聞いた後、テーマを変更し実際に第十堰を調査した報告もあった（資料④）。1月末に発表会を開き、他者の発表を聞いて感想を書く（他者評価）ことまた自分の発表を振り返って書く（自己評価）を行った（資料⑤）。また発表の様子とレジュメは最終的にDVDと冊子とし、受講した学習者とゲストの講師に配布した。

3 「吉野川プロジェクト」を経て

日本人参加者の一人であり筆者の一人（吉廣）が、2005年10月時点で連絡可能な吉野川プロジェクトの参加者にアンケートを実施した。その中で得られた参加者の声を「学習者（留学生）の声」、「日本人参加者の声」として以下に記述する。

3-1 アンケートによる学習者の声

4名の学習者から吉野川プロジェクトの感想が得られた。内訳は、2001年に受講した1名（以下、学習者A）と、2004年に受講した3名（以下、それぞれ学習者B、学習者C、学習者D）である。アンケート項目は、①吉野川プロジェクトに参加した満足度、②役に立ったこと、③困ったこと、④日本人の存在、⑤主体的活動、⑥自己評価の6項目について、%評価と記述形式で問うた。表3に参加した学習者の声を項目別にまとめた。

全体的な感想としては、このプロジェクトを経て、吉野川に関するたくさんの知識を様々な専門家から得られた、そのことで自国の環境と比較し意識するようになった、また、今まで使ったことのなかったPC機器を用いて発表の仕方が身に付いた、さらに日本人参加者との交流で日本人と意見交換できた、などが挙げられた。

表3 学習者アンケート

①満足度	
A: (75%)	今まで全然知らない自然の世界を知ることが出来た・授業はとても楽しかった・いろいろな人に来てくれたのでたくさんの知識を得ることが出来たと思う
B: (75%)	吉野川をはじめ「川」についての知識はあまりにも浅すぎたので、参加して本当に良かった
C: (100%)	専門家たちの話が聞けて勉強になった・吉野川まで行くことができとても楽しかった・普段授業では体験できないようなすばらしい体験ができたこと、そして身近な吉野川について勉強できたことはとてもよい経験になったと思う・今後もこの経験を学習にいかしたい
D: (75%)	資料が充実していた・国土交通省の方は詳しい説明をしてくれた・吉野川の源流に一回行って見たかった
②役に立ったこと	
B: (75%)	エクセルで発表するのは初めてだったので、他の授業にも役に立った・環境に対する意識が身に付いた
C: (75%)	私は〇〇科の学生なので、吉野川沿岸の植物や干潟の生物のことは資源問題を考える時に役に立っている
D: (75%)	吉野川について多少詳しい知識を身につけて日本人とも話すときにも話せる・資料の収集や発表の作成について大変勉強になって、これからずっと使えると思う・自分の専門だけではなくて、せっかく日本に来

たのだから、日本の風俗や名物も勉強するべきだと思った

③困ったこと（もっとこうしてほしかった）

A：（75％）吉野川に見学をしたかった

B：（75％）私の国は環境意識が非常に低いので、このプロジェクトで環境を伝えるよい方法を一緒に考えてほしい

D：（10％）授業内容は充実だったし、たっぷり時間をかけて説明してもらったから、困ったことはなかった

④日本人の存在（なぜ日本人がいたと思いますか？）

A：留学生をサポートするため

C：先生一人だけではなく日本人学生もいることで、よりいきとどいた授業になったと思う・普段日本人学生との交流をもたない留学生にとっては日本人学生と交流をもつよい機会にもなった

D：この授業で各国からの学生たちの感想を交換するのは大事だと思う・日本人の学生の感想も僕たちに最も重要だ

⑤主体的活動

A：（50％）：日本人の友達に手伝ってくれたので助かった

B：（50％）：発表の内容はもうできたと思うが、量が多すぎた

C：（75％）：資料やインターネットで情報収集するだけでなく、実際に橋を作っている現場に行きその現状を観察したD：

（75％）：資料を収集するために、授業中の資料だけではなくインターネットも利用した・収集する過程で吉野川についていろんな知識を覚えた・パワーポイントも工夫してなかなかいい発表になったと思う

⑥自己評価

A：（40％）：その時はまだ日本語が上手ではないので説明のなかでは不十分なところが多かったと思う

B：（25％）：緊張で何を言いたいのか分からなくなってしまった・内容は多すぎたから発表時間に迫ってしまった

C：（75％）：写真や地図などを使い、理解しやすく工夫した・緊張もしたけど、伝えたいことは全部伝えたと思う

D：（50％）：資料やパワーポイントの用意は上手くできたが、練習の時間があまりなかったのでちょっと気まずかった

3-2 日本人参加者の声

3-2-1 日本人参加者のアンケート結果

4年の間に参加した4名からのアンケート（以下、それぞれ学生1、学生2、学生3、学生4のように記す）の記述と、参加者である筆者の考察を、3-2-2で述べる。

アンケート項目は、①吉野川プロジェクトに参加した満足度、②役に立ったこと、③困ったこと、④居心地、⑤参加した意味の6項目について、％評価と記述形式で問うた。表4に参加した学習者の声を項目別にまとめた。

表4 日本人参加者アンケート

①満足度

1：（95％）他の授業では、こちらからかなり積極的に声をかけない限り、留学生がいても話す機会がなかった・当時、日本語教育に興味があったので、このような機会は非常に貴重であった

2：（50％）少人数での授業、他の方の発言について考えること、学外から来られた方のお話をきくなど、通常の授業では経験できないことをさせてもらえたことはよかったと思う・留学生と触れ合う機会が持てたのは新鮮で日本にいながら何カ国もの人達と交流ができるのは本当に楽しかった

3：（75％）角度を変えて吉野川を捉えていくのは面白かったし、ゲストを迎えて話を聞けて身近に感じる事ができた

4：（60％）吉野川についての新しい知識を得ることができた・留学生との交流ができた

②役に立ったこと

1：（95％）現在日本語を教えているので留学生と接することに慣れた・留学生が話す日本語を実際に聞くことができた

- 2: (25%) 自分が留学生という立場になった時に吉野川プロジェクトで参加していた留学生の授業態度が参考になった
- 3: (75%) 毎日吉野川を車で通っていると、水の量だとか水の汚れなど気にするようになった
- 4: (75%) 吉野川についての話をするとき・留学生とのその後の交流

③困ったこと

- 2: (50%) 人前で自分の話をしたり、発表するということに慣れてなかったこともあり、時々息苦しいと感じた・ただ、そういう時でも先生や他の参加者の方からのフォローや考える時間を十分に与えてもらえ楽になれた
- 3: (75%) 吉野川について、例えば川に生息する生きものに関して、または住民投票などに関して全く知識がなかった為、それを留学生に説明するのは大変だった

④居心地

- 1: (100%) 日本語教育に興味があったため、留学生と一緒に作業するという立場で、実践的な活動に参加できたことは非常に貴重な体験だった・講義やテキストからだけでは分からない感覚を体験することができたと思う
- 2: (50%) 一緒に授業に参加されていた方にまかせてしまっていたと思う・個人的に意見を求められたり発表をしたりすることは苦手だったが、拙いながらも授業に参加させてもらえたことに感謝している
- 4: (50%) 留学生のサポートとして、自分のできることはしたつもりだけど、役に立っていたのか不安だった

⑤参加した意味

- 1: 一つのことを留学生と一緒にすることによって、異文化理解、日本語教育など、様々な分野について、実践的な体験ができた・徳島について客観的な知識を得ることができたことにも大きい意味があったと思う
- 2: 受身でない授業の参加について考えることができた・留学生の方と話をする機会がもてたことに、それからの学生生活には大きな意味があったように思う
- 3: 自分の今住んでいる所に関して興味を持てたこと、そしてそれを留学生と一緒に学べたことに意味があったと思う
- 4: 留学生のサポーターとして・新しい知識を得られた・日本語の知識の再確認(留学生と話をする中で、簡単なことを説明する難しさを感じた場面があった・日本語力をつける良い機会になった)

3-2-2 アンケート結果の考察

アンケート結果から、次の3点について考察する。

＜異文化交流のきっかけ＞

日本人参加者の動機はさまざまであったが、アンケートの結果からは、留学生と接する機会をもてたこと、吉野川についての知識が得られたこと、他の人の発言について考えられたこと、ゲストを迎えて話を聞いたことなどが満足した要因として挙げられた。最も多かったのが留学生との交流に関することで、参加した全ての日本人参加者がそれを肯定的に感じていた。特に学生1では、「他の授業では、こちらからかなり積極的に声をかけない限り、留学生がいても話す機会がなかったので、このような機会は非常に貴重だった」というように、留学生と接する機会を得ることが難しい中で、吉野川プロジェクトは日本人学生と留学生の交流の場を作ったといえる。異文化交流といえば、日本を離れ外国で生活して初めて達成されるものと考えられがちだが、交流の場さえあれば、日本のこの徳島という地域でも十分に異文化交流ができることを、吉野川プロジェクトを通して実感できたといえる。

また、異文化接触を行うことでそれ以降の日本人参加者の新たな意味づけができていたこともわかった。吉野川プロジェクトに参加したことで何か役に立ったことはあるかという質問に対して、現在日本語を教えている学生1は「留学生と接することに慣れたこと、留学生が話す日本語を実際に聞くことができた」とこととあり、日本語教師という目標があり、そのプロセスとして吉野川プロジェクトが役に立ったと感じている。また、学生2は実際に留学を経験する立場になった

ときに、「吉野川プロジェクトに参加していた留学生の授業態度が参考になった」と感じており、自分の留学を通じて吉野川プロジェクトに参加したことを振り返り、その意味を見出している。

＜共に日本の文化を学ぶ＞

異文化交流と同時に日本人参加者の満足した要因として、吉野川について留学生と一緒に学べたことが挙げられる。アンケート結果によると、学生3は参加してから「自分の今住んでいる所に関して興味をもてた」ことや、吉野川について「留学生と一緒に学べた」ことに意味があったと感じており、また学生4では、参加してから「吉野川についての話をする」ときに役立っているという感想が得られた。日本人が日本の文化を学ぶことは普段の生活や、まして大学教育の一環として取り上げられることはほとんどなく、実際どれだけの日本人が日本のそれも徳島の文化を知っているかという、そう多くは望めないと思われる。それは、学生3の「吉野川」について「全く知識がなかった」ために「留学生に説明するのが大変」であったという感想からも推測できよう。そのような意味でも、吉野川プロジェクトは、留学生を対象にした日本事情の授業であると同時に、日本人参加者も日本の文化を学び考えられるよい機会になったといえる。

＜主体的活動の場として＞

プロジェクトワークの重要な柱の一つに「学習者（参加者）がより主体的になる」ということが挙げられる。自らテーマを設定してそのための準備をし、最終的なプロダクトを作成後、評価・反省するといったプロセスの中では、それだけ情報を得るスキルを持っていることや自ら外に向かって発信していくパワーが必要となる。学生2は、プロジェクトワークという参加者全員が主体的に活動するスタイルに慣れておらず、「個人的に意見を求められたり発表をしたりすることが苦手」で「時々息苦しさをを感じる」こともあったようである。ただ、主体的な活動、具体的にいえば自分の意見を自分の言葉で相手に分かりやすく説明するようなスキルを養う教育は、むしろ最近になって注目されるようになったものと思われる。それまで基本的に受け身の授業が当たり前だった者にとっては、いざ自分の考えをみんなの前でうまく説明しようとしてもなかなかできるものではない。吉野川プロジェクトでは、日本人にとってもプロジェクトワークを通じた表現に関する学習が必要なことが確認されたといえる。学生2はさらに、「先生や他の参加者の方からのフォローや考える時間を十分にあたえてもらったことで、楽になれた」ことから、周りの人間環境が整っていることも必要であろう。

4 考察 ～吉野川プロジェクトの目指すもの～

吉野川プロジェクトの参加者、すなわち留学生と日本人学生らは、日本語教育の枠組みにおいて初めてプロジェクトワークを体験した。ここでは両者にとっての一つの学習方法として「吉野川プロジェクト」を考察する。

＜学習者の主体的な取り組み＞

テーマの吉野川はごく身近なものであり、教師が与えたという以上に魅力のあるものであった。さらに最終作成物のレジュメと発表は単位取得のための義務ではあったが、学習者Aのように他の授業にて並行して要求される発表やレジュメの作成の存在があったため、日本語学習の場で練習ができたとしていた。それゆえ日本語教師の助言と訂正を活用し、興味を示さない等の問題は起こらなかった。この点では動機付けにはさほど難しくなかったといえる。

日本語そのものを学ぶのではなく、日本語を使って一つのプロジェクトを遂行するという方法も戸惑いなく受け入れられていた。さらに2001年からの積み重ね

があったため、初年度（2001年）の参加者の最終作成物を見ることによって、2年目以降では何をどのようにすればよいのかの見通しができ組みになっていた。特に自分の発表やレジュメが来年の学生の目に触れるという意識から、同じテーマであっても前年度のものよりも、進化したあるいは精密なものを作成しようとする意気込みも感じられた。すなわち動機に裏付けられた主体的な学習の場となりえたといえる。

<学習方法を学ぶ>

教師自身の「吉野川」に対するリソース（注4）の蓄えは毎年豊かになっていき、また講師から講師への人的ネットワークの広がりを実感した。教師の提示したリソースから自らのリソースを加え、または拡げて参加者は発表の準備を行った。確かにそれは日本事情の単位取得のためという点では終焉を迎えたが、そこで培った情報の取り方また講義や講演の受け方というものは他の共通教育の授業や講義の学び方に通じるものがある。「吉野川」の知識を得ること、大学生としての学習の方法を学ぶことの2点が習得できて「吉野川プロジェクト」の教育的意義があるといえる。

<協同学習の場>

日本人学生の声からは、留学生、教師とともに「吉野川プロジェクト」に取り組む過程で「徳島大学に来て初めて吉野川の存在の大きさを知り」、「留学生の日本語を助け、また留学生と一緒に発表に参加することによって」自分達が普段何気なくさせられている調査報告活動が異文化理解の場となったことが述べられている。

さらに、日本人参加者は本来、異文化交流に興味があり、留学生の存在は知っていても、実際に一緒に活動する機会がないことを感じていた。それゆえに単位が出ないのにも関わらず、敢えてこのプロジェクトに参加しようとしたといえる。また留学生からも、日本人の存在に関して「留学生をサポートするため」「日本人学生もいることでよりいきとどいた授業になった、（中略）日本人学生との交流を持つ良い機会にもなった」「日本人学生の感想も僕たちに最も重要だ」のように、一緒に活動することの意義が述べられていた。

大学内での並存でなく、共存を意識した活動を組み立て、そこに学生同士が協同しうる場ときっかけを作ることが要請されている。

<日本語のレベル>

4年を通して約40名の留学生が「吉野川プロジェクト」を体験した。日本語力が低いために講師の話を聞くのもやっとという者がいたのも、また受講途中に断念した者もある。そういった学習者に「日本事情」を「日本語」そのものを学ぶ場として開講しようと考えたこともあった。しかし、それは「日本語」の授業に預ける側面であり、日本語力の低い学生には出来る範囲での取り組みとし、吉野川を調べる中で必要な日本語及び表現といったように個別の指導の部分を増やしたのも事実である。最終的にはレベルに応じた発表内容となっている。

参加者らが、課題に対する自らのレベル（日本語及び知識量）を確認し、主体的に取り組む、かつ様々なリソースを利用しながら学習方法を見直し、参加者とともに協力しながら学習を進める、いわゆる「自律学習」へ向けての扉となることが、「吉野川プロジェクト」の目指すものである。

5 おわりに

「吉野川プロジェクト」はその第一期を終了し、現在は筆者（三隅）の担当を離れて第二期へと移行した。教師が変わることによって、「吉野川」という無尽蔵なリソースはまた違った側面を見せるであろう。

プロジェクトワーク型の教育活動は、実施後すぐにその教育効果が学習者に実感されるものではない。様々な学習と生活に関する活動と人間関係が折り重なっている。活動を通して培ったことはこれからの研究生活と徳島での生活に役立つものである。

吉野川プロジェクトでは、リソースとしての吉野川から参加者自身がそれぞれの吉野川そして徳島像を作り上げること、とプロジェクトワークそのものが持つ学ぶことの楽しさを体感することこの2点が教師のねらいであったといえる。

また、これらのねらいは留学生のみならず徳島で暮らす日本人学生にとっても必要なものであることも、今回の調査結果から本稿を執筆して実感した。

今後、留学生は専門教育へと移り、徳島を離れて日本のどこかで、または帰国して徳島大学での留学生生活を振り返る際に、きっと「吉野川」を思い出すことを望む。インターネットや書籍で入手できる知識だけではなく、留学生が、実際に暮らして肌で感じた吉野川の素顔と自分が赴いて調べた内容を多くの日本人、自国もしくは他国の人に伝えてくれることを願う次第である。

謝辞：4回のプロジェクトを経て、「吉野川」が脈々と生きていることを改めて認識し、またその恵みに預かって生活していることを実感しました。そして熱心に課題に取り組んでくれた留学生、日本人学生、そして吉野川プロジェクトの継続を何よりも支援してくださっている講師の皆様に深くお礼申し上げます。

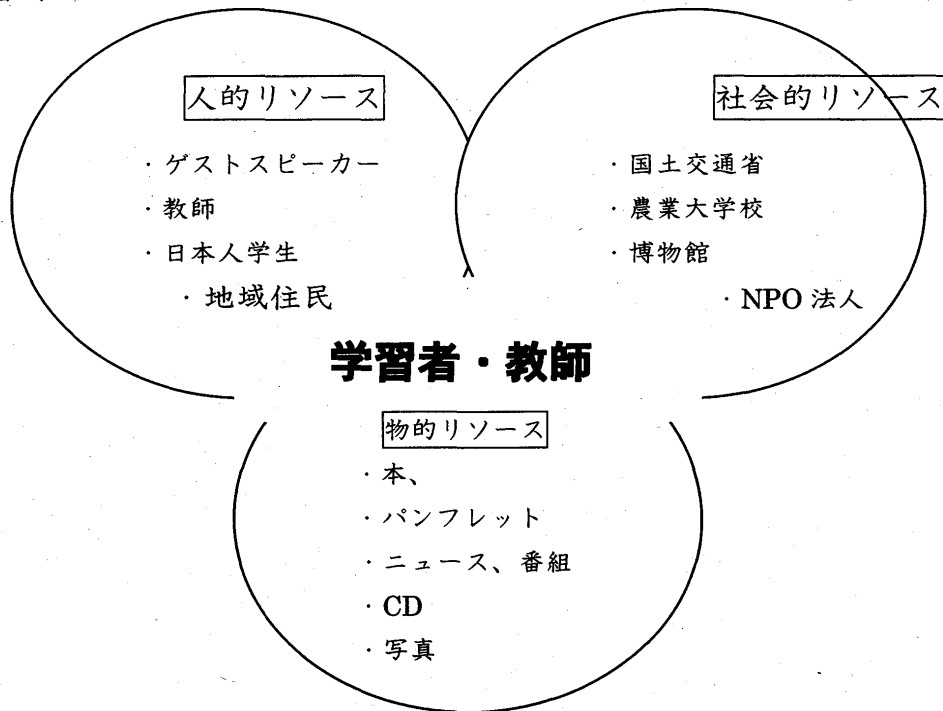
本稿は、3と参考資料の作成を吉廣が、他は主に三隅が担当した。

注1) 協同学習は、協力して学び合うことによって、学習内容の理解と習得を目指すとともに、協同の意義に気づき、協同の技能を磨き、協同の価値を学び内化することを意図した教育活動をいう。単なるグループ学習ではなく、①互恵的目標の設定②目標の共有化と個人責任の明確化③促進的相互交流の活性化の三条件を満たすものをいう。参考文献関田(2001)参照

注2) 田中望他「日本語の教育とその理論」P.131 (1993) 放送大学教育振興会

注3) 筆者の三隅は、日本語教育における日本人との共同作業型の学習活動を「日本人参加型プロジェクトワーク」と名付けその意義及び日本語学校やボランティアの教室といった複数の機関での実施状況等を述べている。参考文献 Gehrtz 三隅(1997)参照

注4) 吉野川プロジェクトのリソースは以下のように図示される。



参考文献：

- ・ D.W.Johnson 他著 関田一彦訳 「学生参加型の大学授業—協同学習への実践ガイド」 2001 玉川大学出版部
- ・ Fried-Booth.D.L “Project Work” Oxford University Press. 1986
- ・ Gehrtz 三隅友子「共に学ぶ場としての『日本語教室』」日本語学 明治書院 1992 1月号
- ・ Gehrtz 三隅友子 「日本語教育における活動の枠組みにおける一考察～日本人参加型プロジェクトワーク～」 JALT 日本語教育論集第2号 1997
- ・ Gehrtz 三隅友子・上田和子「双方向学習の試み～交流セッションから見えるもの～」国際交流基金日本語国際センター紀要第12号 2002
- ・ 田中望他「日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—」1993 大修館書店
- ・ 田中幸子他「プロジェクトワーク・コミュニケーション重視の学習活動1」1987 凡人社
- ・ Ian Tudor “Learner-centredness as Language Education” 1996 Cambridge Uni.Press

	2001年	2002年	2003年	2004年
1回	自己紹介	自己紹介 あめんぼを読む	自己(他己)紹介 北島三郎の唄	自己紹介 北島三郎の唄
2回	あめんぼを読む 四国の川を考える 会作成小冊子	ゲスト・スピーカー準備 質問を考える ビデオ NHK「吉野川河口」	ビデオ NHK「吉野川河口」	吉野川って?
3回	ゲスト・スピーカー準備 質問を考える	ゲスト・スピーカー1「吉野川をめぐる事業について」 国土交通省 湯佐氏	クイズと源流 ゲスト・スピーカー準備 質問を考える	ビデオ NHK「吉野川河口」 ゲスト・スピーカー準備 質問を考える
4回	ゲスト・スピーカー1「吉野川をめぐる事業について」 国土交通省 湯佐氏	復習	ゲスト・スピーカー1「吉野川をめぐる事業について」 国土交通省 江口氏	ゲスト・スピーカー1「吉野川をめぐる事業について」 国土交通省 江口氏
5回	復習・準備	準備	復習・NHKニュースと前回の感想	準備
6回	ゲスト・スピーカー2「吉野川が育てる産物」 農業 立石氏	ゲスト・スピーカー2「吉野川が育てる産物」 農業 立石氏	準備	ひょうたんじまクルーズ
7回	復習・準備	吉野川クルージング(国土交通省)	学内講義「吉野川流域のことば」 岸江教授	復習 次回の準備
8回	ゲスト・スピーカー3「魚について」 県立博物館 佐藤氏	農業及びクルージング反省 次回の準備	復習 次回の準備	ゲスト・スピーカー2「吉野川と農業」 徳島県立農業高等学校 野田氏
9回	復習・準備	ゲスト・スピーカー3「吉野川風景」 写真家 宮武氏	ゲスト・スピーカー2「吉野川と農業」 徳島県立農業高等学校 野田氏	振り返りと準備
10回	ゲスト・スピーカー4 写真家 田村氏	復習 各自のテーマ調査検討	復習	ゲスト・スピーカー3「可動堰問題を考える」 市民団体 姫野氏
11回	休講予定	各自のテーマについて調査	ゲスト・スピーカー3「可動堰問題を考える」 市民団体 姫野氏	休講 各自 発表の準備
12回	各自のテーマについて 冬期休暇を終えて	学内講義「地理的観点からの吉野川」 平井教授	最終発表の準備	最終発表の準備
13回	ゲスト・スピーカー5「可動堰問題を考える」 市民団体 姫野氏	ゲスト・スピーカー準備 最終発表の準備	最終発表の準備	最終発表の準備 練習
14回	原稿作成	ゲスト・スピーカー4「可動堰問題を考える」 市民団体 姫野氏	最終発表会 録画	最終発表会 録画
15回	最終発表会 日本人のゲストを招く	最終発表会 録画予定		

資料②－1

＜吉野川・農業に関するクイズ＞

- ① 徳島県は男性と女性の人口はどちらがどのくらい多いですか。
- ② 徳島をなぜ阿波の国というのですか。
- ③ 徳島県の市と町と村の数はいくつですか。
- ④ 徳島平野を流れる一番大きな川の名前は何ですか。
- ⑤ 徳島は太陽の出ている時間は長いですか短いですか。
- ⑥ 現在の人口は平成7年と比べて減っていますか増えていますか。
- ⑦ 徳島の農林水産業が総生産に占める比重は全国の平均と比べてどうですか。
- ⑧ 農林水産業の中でも比重が高いのは何ですか。
- ⑨ 徳島の農業が盛んなのはなぜですか。
- ⑩ 農業人口は増えていますか。また男性と女性のどちらが多いですか。

☆資料の1頁目の農林水産物を確認し、チェックしてください。

☐ チューリップ

☐ かんしょ

☐ カリフフラワー

☐ うめ

☐ しいたけ

☐ れんこん

☐ ブロイラー（鶏肉）

☐ あゆ

☐ わかめ

☐ たけのこ

☐ すだち

☐ たちうお

☐ 洋らん

☐ にんじん

☆1頁と2頁の特産物から一つを選んで自由に作文しなさい。

(徳島で初めてであったものや国のものと比べてどうか等)

出身 (マレーシア) 氏名 (○ ○)

< 私と すだち >

すだちといえば、徳島の特産物、つまり徳島で一番有名な野菜である。スーパーとか八百屋でよく売られている。私は徳島のすだちを買ったことがないけれども、食べものに入っているすだちをよく食べる。すだちは、マレーシアでもあるので、徳島に来たばかりの時は、すだちが多く見られることがあまりびっくりしなかった。

徳島のすだちはマレーシアのすだちと比べると、徳島のすだちが小さい。日本ですだちはよくおすしにかけられるけれど、すだちのジュースがあまり売っていないと思う。マレーシアですだちのジュースがあるし、他の食べもの (たとえば、Laksa, Mihun) にもよく入っている。すだちは徳島とマレーシアで食べものをよりおいしくするためによく使う。

☆11/26 (水) の特別ゲスト○○先生に農産物に関して、農業に関しての質問を書いてください。

・現在の日本の若者は農業に関する仕事に興味をもっていますか。

(マレーシア)

・ベトナムでは野菜の値段と肉、魚の値段には差がすごくあるけど、日本ではその差がほとんどないです。なぜですか。

(ベトナム)

・韓国の農村には「Dure」という風習があります。「Dure」は忙しい時、村の人々が一日ずつ一家に行って、一緒に仕事をして手伝ってもらい家には食事とか準備をして一緒に食べるのですが、日本にもこのような風習がありますか。

(韓 国)

出身（ 韓国 ）氏名（ ○ ○ ）

吉野川をめぐるゲストスピーカーの話を聞いて

1（国土交通省）【70％】

○○さんの話を全部は分からなかったですが、画面を見ながら説明を聞いたので、吉野川のマわりの地名などが確認できるようになりました。先週の月曜日に徳島から高知まで旅行をしたのもちょっと役に立ちました。

2（農業大学校）【70％】

○○さんの印象はまるで私の祖父のようで親しく感じられました。今まで農業についての経験を生かして本を作った人と直接会うことになって本当にうれしかったです。世界で有名な川の話をはじめとして、吉野川についての話を中心にして話してくださいました。本の中で見つけられた質問の答えを時間の関係で全部聞けなかったのは少し残念でした。

3（クルージング体験）

毎日自転車で吉野橋を渡って見るたびに、海のように広いと思った川を船に乗って回ることができてわくわくしました。久しぶりに子供のように喜びながらいっしょに来た人々と写真をとったり、湯佐さんの説明を聞いたりしました。船に乗っている間には風が強くて少し寒かったですが、さわやかな空気でのいい気持ちでした。これも徳島での良い思い出の一つに残ると思います。

4（写真家）【85％】

一枚のすばらしい写真が出るにはかなり時間と努力がかかるのを分かるようになりました。○○さんのように吉野川のありのままを写真で残ろうとする方がいらっしゃって、もっと吉野川が美しく保存されていると思います。○○さんはただ写真だけを好きではなくて、我々が住んでいるところやその周り、ひいては自然全体を愛する方だと思います。

5（市民団体代表）【90％】

○○さんのお話は一番聞き取れやすかったです。それに私の発表のテーマが吉野川のダムについてですので、○○さんのお話と関係がありました。特に最近「緑のダム」についていろいろな実験や調査などが行われているという話と、全国的に吉野川が『川の学校』としてよく知られて、多くの若者たちはさまざまなボランティア活動でやりがいを感じているという話は印象に残っています。

徳島大学総合科学部

○ ○, △ △, × ×

今から私たちと一緒に第十堰へ行ってみませんか？

私たちは1月4日、第十堰に行きました。これから、第十堰に行くことになったきっかけと、スケジュール、第十堰の環境、そこで行われていた調査を発表させていただきます。

最初は吉野川の源流に行く予定でしたが、姫野さんのスピーチを聞いてから、第十堰に行きたくなりました。それで予定を変更して、第十堰に行くことになりました。

私たちは1月4日に第十堰に行くことにして、3日にインターネットから第十堰に行く方法を調べました。

10時40分 四国大学前で、バスの二条・鴨島線に乗って、「第十新田」バス停まで行きました。みかんを食べながら、美しい吉野川の景色を眺めました。吉野川の河口から15キロ離れた第十堰に近づくにつれて、川の幅が狭くなって行くのです。私たちは美しく光る川、空に広がる雲、自然そのものの景色を見ながら、第十堰への期待感でドキドキしていました。その一方、曇っている空を見ると雨の心配もありました。

第十新田のバス停でバスから降りた瞬間、悪臭と強風に襲われました。それに、第十堰に広がる葦は荒れ放題でした。

私たちは、そこで、何かを調査しているおじさんたちに会いました。そのおじさんたちは不思議な形の測量機械を持って調査をしていました。インタビューしてみると、第十堰の形状把握調査をしているのがわかりました。おじさんたちの話しによると、第十堰がまだ可動堰になる可能性もあることがわかりました。

第十堰は思ったより、ごみが多かったので、失望も少ししました。けれども、水がきれいで鮎がいっぱい泳いでいるのが見えて、第十堰の自然を感じました。それで、第十堰をそのまま守るべきだと思いました。

帰ろうとした時、私たちの目の前を去って行くバスを見ました。それで、昼ご飯を食べようとしたのですが、店が見えませんでした。その時、トラックにのったおじいさんが現れました。まずは、後ろに乗せてもらいましたが、途中で、おじいさんはトラックを乗用車に借りかえてきて、うどん屋まで、乗せてくれました。おいしいうどんを食べたまではよかったのですが、そのせいで、またバスを逃してしまいました。それで次のバスが来るまでは1時間半ぐらい時間があったので、ユニクロ、キョウエイで遊びました。

2時40分のバスに無事に乗って四国大学まで帰ってきました。

風のせいで大変でしたが、吉野川の新しいところを見ることができて、楽しかったです。

資料⑤

2004 年度発表 「第十堰プロジェクト」の感想

発表者 ○ ○ , △ △ , × ×

○他者評価

おもしろい小旅行だ。バスとトラックも乗った。自分の目で第十堰を見て、私も行きたい。

第十堰の水がとてもきれいで、あゆもたくさんいるのに、ゴミがちらかっているのを見てとても残念に思いました。おじいさんいい人！

感情的な発表でとても面白かったです。しかも、細かいところまで観察してすばらしかったです。

第十堰の環境問題について、写真を見せながら詳しく説明してくれた発表が良かったです。

おもしろかったです。しかし、環境問題の深刻さは強く感じました。

調査過程やその時の気持ちが詳しく述べられていて聞いていておもしろかったです。

色んな所を見ていて、自分で見ているからわかりやすい。発表が上手、調査あり笑いありでよかった。

そのおじさんと会いたい！第十堰を了解しました。

いい経験したと思います。

○自己評価

第十堰に行ったことと、このレポートを書いたこと全部いい経験だったと思います。

思ったよりうまくいかなかったので恥ずかしいです。

緊張した。私の写真が恥ずかしかった。